

「笑顔」増やす闘い



トウモロコシのパンと小魚、野菜の給食を食べる小学生たち＝ケニア西部サウリ村で、中野智明氏撮影



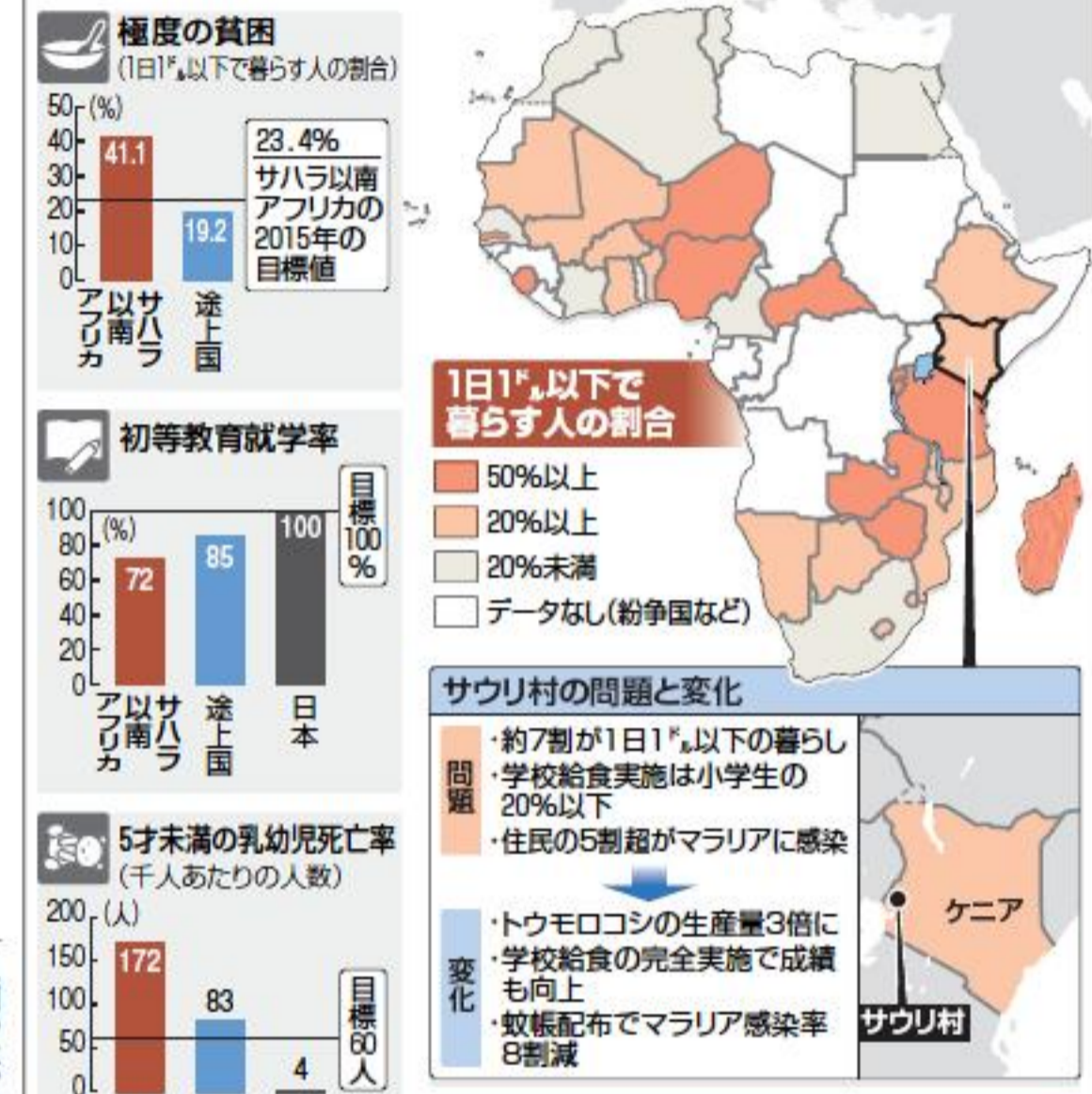
温かい料理を受け取った子どもたちから笑顔がこぼれた。ケニア西部サウリ村。貧困やエイズに苦しんできた村は食糧増産に成功し、学校給食を軌道に乗せた。変化を後押しするのが、先進国の援助資金を集中させ、成果を引き出す「ミレニアム村」プロジェクトだ。国連主導の「実戦」はアフリカ各地に広がる。だが貧困問題への日本も世界の関心はまだ低い。

脱貧困へ食糧増産

サウリ村のニヤムニニア小学校。午前の授業が終わるやいなや、子どもたちが歓声を上げながら教室を飛び出し、給食室の前に列を作った。それまで多くの子どもは庭に畑を耕していた。だが2年前、給食が毎日配られるようになってからは、670人の児童全員が午後も勉強を続けている。食糧増産に絞って、その前に列を作った。

「子どもたちの栄養不足が治り、成績も上がった。村人も喜んでいて、ミレニアム村の成功を誇りに思っている。人口5千人のサウリ村は、04年に始まったミレニアム村プロジェクトの最初のモデル村だ。『耕地があり、雨も降るのに農業が弱い。まずは食糧増産に絞って、それを突破口に生計向上を図ってきた』。約70人の現地事務所を率いるトウモロコシの種が無料に配布され、普及員が指導

ミレニアム開発目標とアフリカ



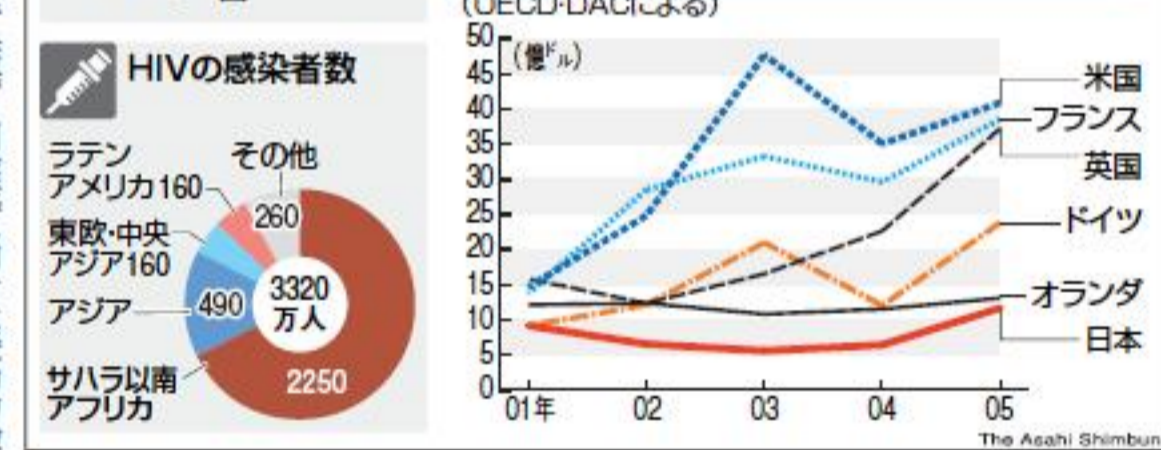
サウリ村の問題と変化

- 約7割が1日1ドル以下の暮らし
- 学校給食実施は小学生の20%以下
- 住民の5割超がマラリアに感染

変化

- トウモロコシの生産量3倍に
- 学校給食の完全実施で成績も向上
- 蚊帳配布でマラリア感染率8割減

主要国の対アフリカODAの推移



援助強化足踏み

暗黒大陸と呼ばれたアフリカに、最近、経済成長や紛争の減少など明るい変化が生まれている。だが一方で、大きな影を落とすのが貧困だ。サハラ砂漠以南では、2割近い乳幼児が5歳までに命を落とす。ミレニアム村プロジェクトを提唱す

最大の課題だ。これは、貧困削減を目指す取り組みすべてに共通する。援助と自助努力が両輪となっており、目標の達成は可能となる。だが現実には厳しい。主要先進国の首脳は05年の英クレンイグルス・サミットで、アフリカの貧

明確な戦略欠ける日本

日本は支援強化に向けた国際社会の旗振り役を期待される。来年、5年に1度の国際会議「第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)」やアフリカが主要課題の一つとなるG8サミットを主催する

十分な援助を提供していない。サックス教授は、いらたを隠さない。独などが15年までの0.7%達成を目指してODAを増額する一方、資源獲得を狙う中国がアフリカ支援に力を入れる。明確な戦略を欠いた日本に対する落胆や不満が募る中、アフリカ援助の再構築を求める声が強まっている。(望月洋嗣)

毎月報告します

アフリカと聞いて何を連想しますか? 広大な自然、極端な貧困、医療の遅れ、民族紛争、難民流出...。その姿が国際社会の援助や自立への努力で変わりつつあります。例えば、貧困を脱した地域がある半面、貧富の差の拡大や環境破壊などが起きています。地下資源をめぐる、中国などを巻き込んだ新たな外交戦も生まれています。

「外交力」の正念場です。私たちは来年夏に向けて毎月、現場と国際社会の視点を重ね合わせ、地球が抱える問題の縮図であるアフリカを報告します。(外交・国際エディター 市川速水)